

会員の広場



パートナーとしてのASEAN

小橋 新一郎 (東京)

3・11東日本大震災の後、私が知る限りで、最初に義捐金を申し出てくれた国はタイであった。そのタイが大洪水に見舞われ日系企業の工場にも深刻な被害が発生している。被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。2003年から2年間、銀行員としてタイに滞在した縁と経験から、ここで日本とASEAN(東南アジア諸国連合)の関係について述べさせていただきます。

タイへの赴任前は国内営業の担当であった。当時、日本経済は冷え込んだままで、企業の投資意欲は減退し、設備資金需要が乏しく、商売とする案件を発掘するのが大変であった。ところが、タイ着任後の挨拶回りでは、お客様から次々と設備資金借入れのお話をいただき、たいへん驚いた。日本とは一八〇度異なる、資金ニーズ旺盛な世界であった。

当時新聞には連日のように、日系企業の中国進出の記事が掲載され、中国に対する認識が日毎に高まっていた。天津や深々等に加え、新たな地域に日系の工場が建設され、上海が中国の中心都市として急速にその地位を築き上げていった時代である。

しかしながら、その中国を飛び越えてタイに着任した私が目にしたのは、中国でよりむしろ存在感が大きい日系企業の姿であった。日本の空洞化は、その受け皿となった国々での日系企業工場進出ラッシュと裏腹の関係にある。生産の現場が海外に移り、日本で設備

資金ニーズが減退し、タイでは増高するのは自明の理であった。気がつけばASEANは、私の想像をはるかに超えて日本にとって重要なパートナーであった。

日本企業は技術力に定評があるが、これらの地域で資材が揃い、インフラが整備され、生産コストに競争力があればこそ世界で通用する商品が産み出されるのである。労働力は優秀で教育により高いレベルの生産技術を習得し、出来上がった製品の品質は世界標準をクリアしていた。自動車産業は典型例の一つであるが、ASEAN製の部品を組み込んでASEANで生産した自動車の世界に向けて輸出されていることは、その証左であると業界の方に教えていただいた。

当時、中国での生産モデルは広く知られていたが、ASEANというパートナーへの認識は十分ではなかった。今目的にも震災で日本のバリューチェーンの広がりを再認識したごとく、洪水報道で日本の技術を商品の形で世界に送り出す生産基地であり供給基地とな

った実態や進出規模の大きさに改めて気付かれた方もいらっしゃると思う。

またASEANは概して日本に友好的で、いずれも企業誘致に熱心であるが、とりわけタイでは日本への関心が高い。文化的にもタイ人向け日本食店が増加し、日本のポップスに人気があり、街には日本と見まがうタイ語のマンガ屋があつて、日本のキャラクターが絶大な人気を誇っている。ブランド名に日本語を使い、中にはひらがなをそのまま使ったブランドもある。

こうしたASEANを重要なパートナーとして一層の連携強化を図ることが政治的にも経済的にも必要と思われる。私が心配するまでもなく着実にASEANに対する国民的認識は深まっているのであろうが、大洪水に見舞われたタイに対しては日系企業の現地生産体制を守ることもあることを認識し、日本の治水技術を生かした根本点的なインフラ整備等に官民を挙げて取り組むことができれば素晴らしいと考えている。